

個別法と集団法で行ったバウムテスト結果の印象の相違

— マッチング法と印象評定, 検査者体験から —

The Differences in the Impression of the “Baumtest” between Tested by Individual and Group Conditions

— Comparison with Matching Analysis, Impression Rate, and Examiner's Impression —

佐渡忠洋¹⁾・坂本佳織²⁾・田中生雅^{1) 3)}・山本真由美^{1) 4) 5)}・緒賀郷志⁶⁾

Tadahiro Sado, Kaori Sakamoto, Mika Tanaka, Mayumi Yamamoto and Satoshi Oga

抄録

わが国におけるバウムテスト研究は、実施法の要因が軽視されてきた傾向にある。そのため、実施法の要因は未だ検討されておらず、知見の多くが集団法で収集されている。そこで本稿は、実施法の要因を解明することを目的に、同一対象者に個別法と集団法とでバウムテストを一度ずつ施行し、両結果を絵の読み手が受ける印象に焦点を当てて比較した。検討に際しては、マッチング法、印象評定を用い、検査者体験についても吟味した。その結果、個別法と集団法とで施行したバウムを、絵の読み手は比較的容易に組み合わせることができ、印象評定においては全ての項目で差が無かった。検査者体験を吟味した結果、マッチング法と印象評定の結果とは異なり、両実施法のバウムには印象の差が認められた。以上から、絵の読み手の印象には両実施法で大きな差はないことが示されたが、検査者の視点からすれば、検査者が個別法で対象者の描画過程に同伴することもあって、集団法よりもバウム（対象者）イメージとの心理的距離が近くなるため、両バウムの形態が類似していても、異なる印象を受ける可能性が示唆された。

キーワード：実施法・バウムイメージ・解釈

I はじめに

バウムテストは、現在、わが国で頻繁に用いられる心理アセスメント技法である（小川・福森・角田，2005）。本技法の実施法は、個別法と集団法とに大別できる。前者は検査者と被験者が1対1で行うものであり、主として臨床場面で採用されやすい。一方、後者は1名（以上）の検査者が多数の対象者に対して同時に行うもので、調査場面で採用されやすい実施法である。

従来、描画法の結果が状況因子から強く影響を受けるとの指摘がある（Tolor, 1968）。筆者らも、わが国で実施法の要因が未検討であることを問題視し（佐渡・坂本・伊藤，2010）、描かれたバウムを数量的に検討した先行研究の多く

が、集団法によって調査されているか、実施法が不明瞭であることも指摘してきた（佐渡，2010）。つまり我々は、わが国のバウムテスト研究において、実施法の要因が軽視されてきたことに言及してきた。

描画法の研究の中で、実施法の要因に言及した報告はわずかである。サークルテストでは、個別法と集団法以外の要因が介入しているため断言は避けているが、集団法に比べ個別法で描かれる円が小さい傾向が指摘されている（青木，1981）。S-HTP法では、実施状況の記載が少なく不明瞭な部分が多いものの、小中学生の個人面接場面と集団場面の結果を吟味し、両結果の印象に違いがあることが報告されている（上田，2004）。風景構成法では、同一の大学生に個別法と集団法とで施行し、その結果を「関係性」の観点からとらえ、集団法の描画には個別法とは別の次元と思われる特徴が読み取れることが指摘されている（佐々木，2006）。しかし、バウム

1) 岐阜大学保健管理センター

2) 社団法人岐阜病院

3) 岐阜大学医学部附属病院精神神経科

4) 岐阜大学医学部附属病院糖尿病代謝内科

5) 岐阜大学大学院連合創薬医療情報研究科

6) 岐阜大学教育学部

テストに関する報告は少なく、幹先端処理が実施状況に影響される可能性があることや（岸本, 2002）、結果が状況依存的で、「研究目的で集団法で施行したような場合、その乱れに驚かされる」（高石, 2005）との指摘があるのみである。仮に個別法と集団法とで描かれたバウムが対象者の異なる側面を表しており、集団法（調査研究）で得られた知見が個別法（臨床場面）のバウム解釈に適用できないとするならば、研究と臨床とに乖離が生じていることとなる。このような問題を避けるために、両実施法の結果を比較し、実施法の要因を検証することが必要である。

そこで本研究は、同一の対象者に対して個別法と集団法とによるバウムテストを一度ずつ施行し、両結果を比較検討する。今回は、マッチング法と印象評定を用いて、絵の読み手が受ける印象に焦点を当てて検討する。さらに、両実施法の検査者体験も考慮しつつ、適宜事例も提示する。

II 方法

1 対象者

総合大学の心理学系講義を受講していた学生48名（年齢M=19.5±2.17, 男性14名, 女性34名）。

2 調査手続き

2007年1月（26名）と同年4月（22名）に、2回にわたって調査を行った。対象者らにバウムテストが個別法と集団法とで2度行われることを伏せ、支障のない程度に調査内容を説明して調査協力への同意を得た。その後、対象者らをその場でランダムに2群（A群とB群）に分けた。集団法は2群合同で行い、個別法は集団法の前後1～7日の間隔を空けて同一の検査者が行った（図1）。バウムテストは4B鉛筆とA4画用紙を縦長の向きで配付した後、“実のなる木

を描いて下さい”との教示で実施した。

個別法：1人に対して20分の時間を確保し、調査スケジュールを立てた。実施は面接可能な部屋で行い、樹木が見えないように配慮した。対象者と軽く挨拶をし、協力への感謝を伝えした後、用具を手渡して施行した。描画後、バウムに対する簡単な質問を行った。なお、調査時間は10～20分程度であった。

集団法：講義の時間に30分の時間を確保し、樹木が見えないように配慮した上で、40名程度が受講可能な講義室で行った。対象者同士の間隔をあけて座るよう求めた後、用具を配付して施行した。約8割の対象者が描き終わった時点で、描き終わった者には待機するよう求めた。その際、再び描き始めた者に対して制限はしなかった。描画後、バウムに対する簡単な質問紙を配付し記入を求めた。なお、調査時間は20分程度であった。集団法の実施では、時間制限の教示を加える必要性が指摘されている（高橋・高橋, 1986）。しかし、条件を統制する上で、本研究ではあえて教示を行わなかった。

以下、個別法と集団法で描かれたバウムをそれぞれ個別バウムと集団法バウムと記し、対象者の発言や質問紙への記述は<>で、評定者の内省報告は<<>>で示す。

3 分析

バウムをマッチング法と印象評定から検討し、評定者はバウムテストを臨床場面で用いている臨床心理士と臨床心理学専攻大学院生とした。そして評定者には、どのような状況下で描かれたバウムであるかが分からないようにし、個別に評価するよう指示した。

マッチング法：得られた全96枚（48対）のバウムを評定者6名によって評価した。最初に得られた48対のバウムをランダムに2群に分けた。そして、24対のバウムを2回にわたって評定者に渡し、“これらは同一人物が2つの異なる条件下で描いたバウムです。これらの中から、同じ人物によって描かれたと思われるバウムを組み合わせさせて下さい。時間の制限は特にありません”と教示した。組み合わせの後、評定者らに対して内省報告を求めた。得られた評価の正答数を数え、6名の平均を算出した。

	1日目	7日目	13日目
A群	個別法	集団法	個別法
B群	個別法		

図1 調査の手順

印象評定：項目数が簡潔で、すでに数種類の心理テストとの関連を検討している渡部・土屋(1995)のSD用形容詞対(20項目7段階評定)を用いた。評定は以下の2つの方法で行った。第1の方法は、全96枚のバウムを上述の指標に従って6名の評定者が個々に評価した。結果は、Wilcoxonの検定(U検定)を用いて個別バウムと集団バウムとで比較した。第2の方法は、6名の評定者に対して48対のバウムを左右に同時に提示し、左のバウムに比した右のバウムの印象を上述の指標に従って評価するよう求めた。提示の際、半数は左に個別バウムを、半数は右に個別バウムをランダムに置いた。得られた評価結果は個別バウムに比した集団バウムの印象として整理した後、6名の平均を算出した。

同一の対象者に対して、2度のバウムテストを行う研究のため、経験の要因を配慮する必要がある。本研究ではバウムテストの1回目と2回目をそれぞれ1stと2ndと示すが、個々の事例の分析を除いて経験の要因に関する検討を除外した。

III 結果と考察

1 マッチング法の結果

評定者6名による48対のバウムの平均正答数は41.5(SD=1.76)であり、正答率は86.5%と高かった。マッチングは24対、48枚のバウムから同一対象者が描いたと思われるバウムを抜き取り、組み合わせていく作業である。すなわち、組み合わせを変更・修正することは可能であるが、作業は消去法にならざるを得ず、1つのズレは2つ以上の誤答を生む可能性を有す

る。この点を考慮すると、本結果の正答率86.5%は高い値であると考えられる。そこから評定者らは、同一対象者が描いた個別バウムと集団バウムとを、比較的容易に組み合わせることが可能であったと推測される。また、組み合わせ後の評定者の内省報告では「形が似ていた」、「形

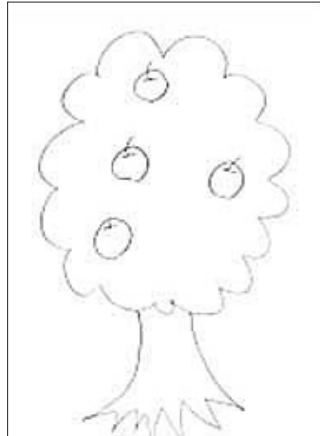


図2 事例Aの個別バウム(1st)

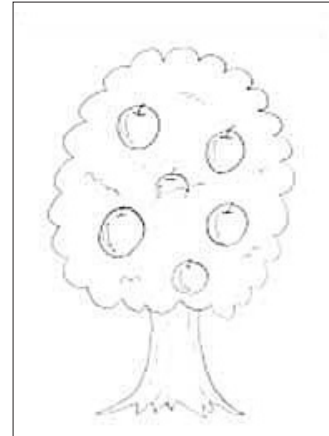


図3 事例Aの集団バウム(2nd)

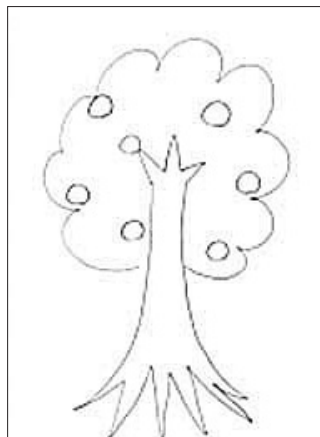


図4 事例Bの個別バウム(2nd)

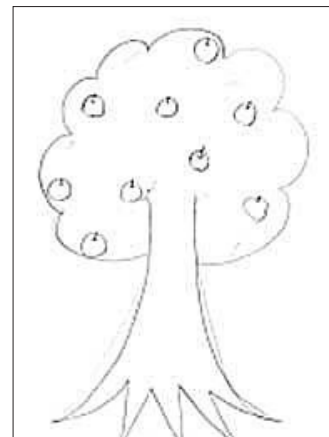


図5 事例Bの集団バウム(1st)



図6 事例Cの個別バウム(2nd)



図7 事例Cの集団バウム(1st)

が似ていなくても線（描線）の特徴や形態の一部から判断した」との意見が多数あった。実施法が異なっても、同一対象者のバウムは、何らかの一貫した特徴が表現されているのだと考えられる。これは再検査信頼性を検討した研究（青木, 1980）においても指摘されている点である。

バウムの印象を具体的に提示するために、評定者6名全員が正答した対象者3名のバウム対を図2～7に提示する。事例A（女性）は、個別バウムと集団バウムとで、形態は酷似しているが、集団バウムの方がやや写実的である（図2・3）。事例B（女性）は、個別バウムで幹先端を三叉に分化させているが、集団バウムでは分化による処理はせず、そのまま筒抜けになっている。しかし、幹の伸び方、根の張り方は両バウムで共通している（図4・5）。事例C（女性）は、本対象者のバウムにおいて針葉樹様の形態は少なかったため、際立つ存在であり、同一の対象者と判断したと思われる（図6・7）。これら3名のバウムは形態も似ているため、組み合わせが容易なバウムであったと推測される。

次に、マッチングの失敗が認められたバウムが評定者6名で比較的一貫していたので、それら2名のバウム対を図8～11に例示する。事例D（女性）は、個別バウムは簡略的に描いたのであろう、線と線に空隙が多いが、集団バウムではそれらの線が繋がっている（図8・9）。両バウムの組み合わせにおいては、描線の運び方（特に樹冠）の差異が、評定者の判断を誤らせたと推測される。次の事例E（女性）

の場合、形態の類似は認められるが（図10・11）、個別バウムの幹の上部が集団バウムのそれと比してやや細く、線も薄くなっている。そのため事例Dと同様、描線の特徴の差異からマッチングの失敗が生じたと考えられる。

このように、マッチングで正答したバウムも、

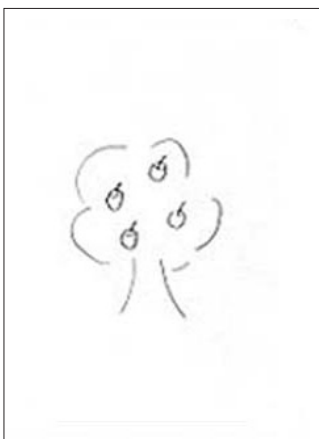


図8 事例Dの個別バウム (1st)

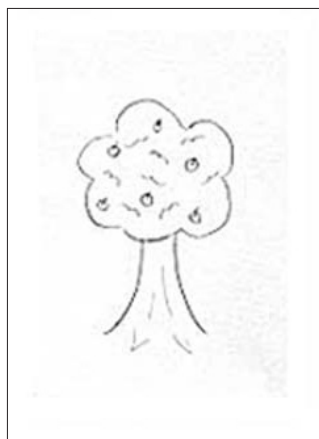


図9 事例Dの集団バウム (2nd)



図10 事例Eの個別バウム (1st)

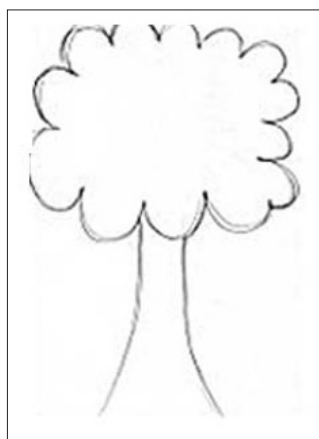


図11 事例Eの集団バウム (2nd)

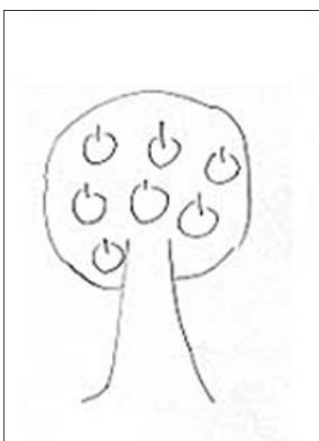


図12 事例Fの個別バウム (2nd)



図13 事例Fの集団バウム (1st)

失敗したバウムも、形態が大きく変化しているわけではない。そこでさらに形態が比較的变化していた事例を紹介する。事例F（男性）は、個別バウムでは簡素な冠型であったが、集団バウムでは幹上部は窮屈に搾られ、サボテンを連想させる放散型となった（図12・13）。このように形態が大きく変化している事例であっても、評定者全員が組み合わせに正答していた。事例Fについて、評定者の内省報告で「幹下部の描線の特徴が似ていた」との意見があった。つまり、「線のはらい」の類似により、マッチングが可能となったと考えられる。ここでも評定者は描線の特徴に注目していることが伺えた。

以上から、評定者は個別バウムと集団バウムの形態の類似点に注目することで、同一対象者のバウムを組み合わせやすかったこと、そして評定者はバウム形態と描線の特徴から判断していることが示唆された。先にKoch（2008）がバウムテストを体系化した際、筆跡学の知見を重視していたのは、彼の深慮と考えられよう。わが国のバウムテスト研究について検討した限り（佐渡ら，2010），描線に注目した（筆跡学からの）研究はほとんど無かった。今後は、描線の特徴に関する研究や、バウムテストにおける筆跡学的研究がより必要となるであろう。

2 印象評定の結果

印象評定の第1の方法で得られた個別バウムと集団バウムの平均値を比較した結果、全ての項目に有意な差は認められなかつ

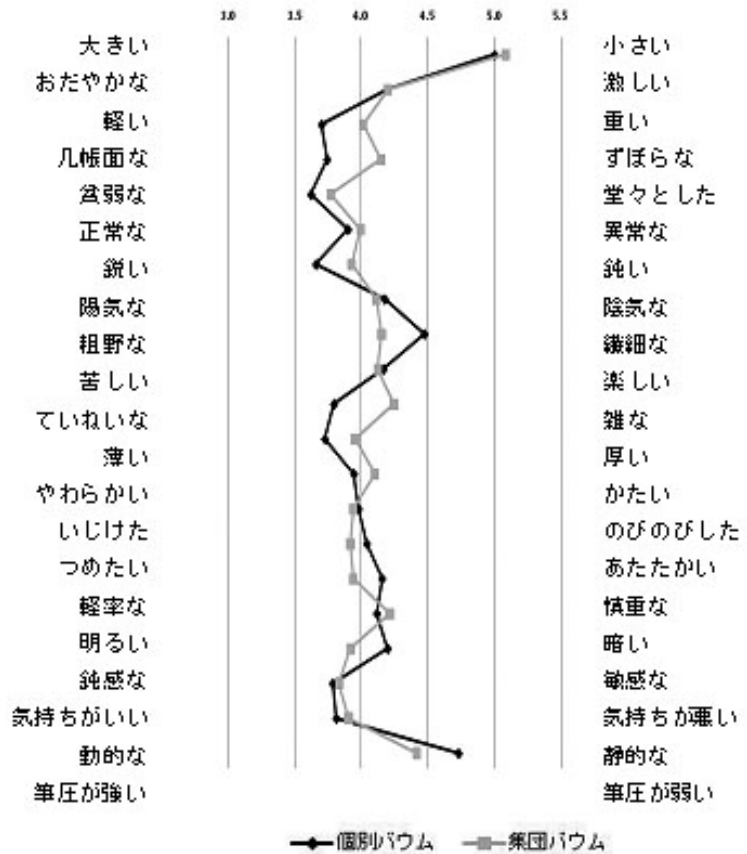


図14 個別バウムと集団バウムの印象評定の比較

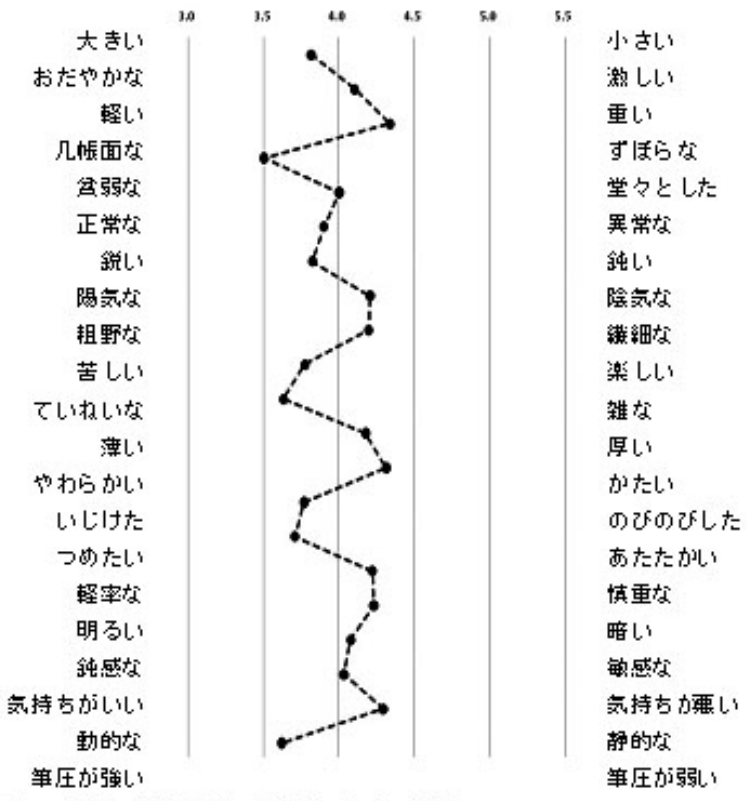


図15 個別バウムと比べた集団バウムの印象

た(図14)。ここから、両baumで読み手が受ける印象に大きな差がないことが示唆された。

続いて、第2の方法の個別baumと見比べた集団baumの印象評定平均値は、7段階評定の中央値(4)に集中し、大きな偏りは認められなかった(図15)。これは印象評定の上述の結果と同様に、両baumで読み手が受ける印象に大きな差がないことを示唆している。

個別法に比して集団法では形態に乱れが生じるとの指摘はあるが(高石, 2005)、マッチング法で見たように、両baumの形態が類似しているため、読み手の受ける印象に差がないのであろう。先行研究で実施法の要因が軽視されてきたのは、両実施法で得られたbaumには、それほど印象に差が無いということを研究者らが体験的に知っていたためとも考えられる。

3 検査者体験

マッチングと印象評定の検討では、個別baumと集団baumとで評定者が受ける印象に差が無いことが示された。しかし、検査者の内省報告からは、上の二つの結果とは異なる点が示された。そこでさらに2事例を詳細に挙げ、検査者体験から検討する。

事例G

Gは19歳の男性である。背筋が伸びており姿勢がよく、検査者の目を見て話すことから、検査者は好青年という印象を受けた。

最初に描いた集団baumは<15mぐらい、10歳、果物の木>だった(図16)。簡素で実の無い、冠型のbaumである。幹と樹冠の描線が途切れ、なおかつ重ねられている点が特徴的と思われた。

次に個別baumで描いたのが、<20mぐらい、10歳ぐらい、果物の木>である(図17)。教示をすると<はい>と返事をし、すぐに描き始める。幹の左側下部を下から上へ一度描き、さらに幹をもう一度上に伸ばした後、幹の右側を下から上に描く。さらに、左・右の順で幹上部に線を付け足し、幹を上方に伸ばす。そして、幹の左側から大きく樹冠を描いて描画を終えた。

集団baumで検査者は、上述した描線の特徴、すなわち、一本線で勢よくbaumを描かないことから、Gの“自信の無さ”を連想していた。しかし個別baumでは、線を付け足すなど、baumのサイズを調整する行為は認められるも、線の運びにたどたどしさは感じられなかった。個別baumを描いてもらう前に、集団baumを見ていた検査者にとっては、両baumでの線の運びの差異に驚きを感じ、集団baumから感じられた“自信の無さ”を、個別baumからは感じなかった。

事例H

Hも19歳の男性である。短髪で、言葉遣いが丁寧であり、おとなしそうな人物という印象を検査者は受けた。

最初に個別baumを描いた。幹を右・左の順で上から下ろし、幹の左側から間隔の空いた樹冠を描いた後、実を加え、<これで>と言いながら検査者に用紙を渡そうとした。この時のbaumを再現したのが図18である(描かれた“実”は再現していない)。しかし、<あ、ちょっと>と言って自ら用紙を戻し、<消しゴムありますか?>と修正を繰り返しながら幹先端の分化に取りかかり始めた。何度も消しては描きを繰り返し、徐々に幹が上へと伸び、細くなっていく。そうして20分かけて描いたのが<結構高い、15m、30年ぐらい、実のなる木>である(図19)。次の集団baumでは、<10m、20年、気になる木>を講義室の窓側の席で時間の最後まで描いていた(図20)。

個別baumの描画中に検査者は、なかなか閉

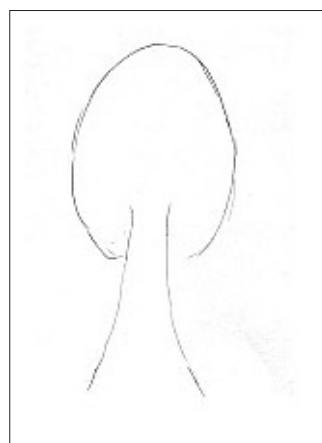


図16 事例Gの集団baum (1st)

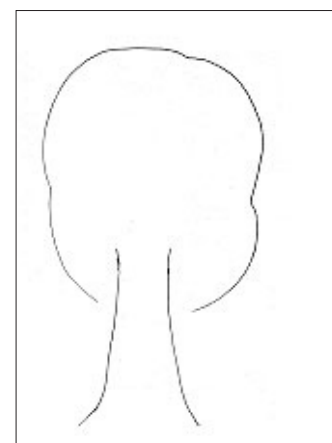


図17 事例Gの個別baum (2nd)

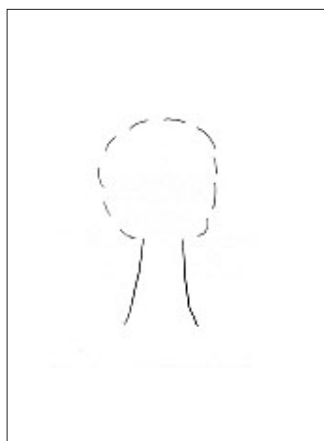


図18 事例Hの個別バウム（再現）

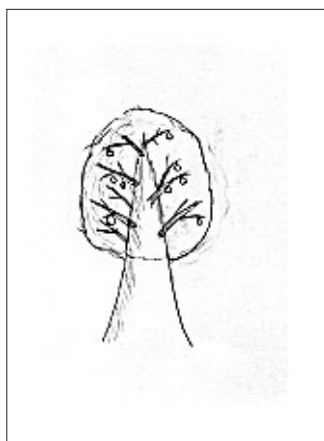


図19 事例Hの個別バウム（1st）

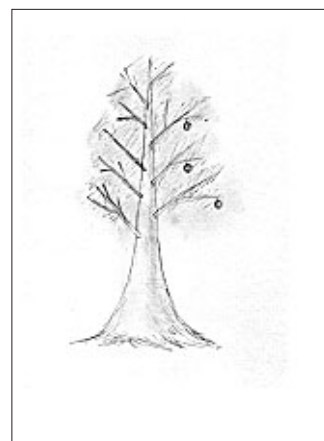


図20 事例Hの集団バウム（2nd）

じない幹先端と、消しゴムを多用するHを見守り、Hにどのような葛藤があるのだろうかと思いをめぐらせていた。20分という非常に長い時間をかけ、やっとモミの木型として仕上がった時は、検査者も安堵を感じていた。それは検査者側もエネルギーを要した時間であった。しかし、集団バウムでは、個別バウムでの苦労が嘘のように、見事な写実的なモミの木型となっていた。一度のバウムテスト体験で、Hがモミの木型へ形作る対応法を得て、集団バウムではすんなりと描くことができたとも、Hにとっては検査者との二人きりという場面が圧倒的に感じられ、その緊張が幹先端の処理を困難にさせたとも考えられる。ここから、二つの実施法でHを見守った検査者であればこそ、両バウムイメージをHと重ねてとらえる際に、個別バウムの幹先端処理の葛藤をどのように解釈していくかが可能となってくると考えられる。

実施法と解釈との諸関係

これら2事例に対する検査者の内省報告から、個別バウムと集団バウムとでは検査者の印象が異なること、その印象の違いに最も影響しているのは、描画過程を見守った検査者体験であると考えられる。

ところで心理アセスメントは、対象者を客観的に評価することを目的とすることが多い。確かにそのような側面は軽視されるべきではないが、描画法（投映法）のような技法では、検査者が受けた対象者イメージと、アセスメントで出された反応イメージの両者に対して検査者が

積極的にコミットメントし、両イメージを弁証法的に理解することが臨床的には重要であると思われる。岸本（2006）は、この点を現代科学の「分ける」理解だけでなく、「重ねる」理解も重要であるとして強調している。個別法と集団法における検査者の「重ねる」作業を考えると、両者は大いに異なると考えられる。すなわち、個別法において検査者は、1対1の場面であるために対象者イメージを直接受け取り、検査者が対象者の描画過程に同伴し、対象者の一挙手一投足に反応することができる。このような検査者の体験があるからこそ、検査者とバウム（対象者）イメージとの心理的距離は近くなる。一方、集団法において検査者は多数の対象者を相手にしなければならず、同時に描画過程にも同伴できないために、個別法と比べるとバウム（対象者）イメージとの心理的距離は遠くなるを得ない。したがって、両実施法では検査者の見守る体験は異なり、故にバウムの印象も変わり、解釈の配慮に変化が生じるであろう。例えば、マッチング法や印象評定では差が無いことが示されても、検査者の印象は評定者らよりも直接的な（生々しい）モノとなるため、バウムの印象に差が出てくるのだと考えられる。

ここでさらに言及しておかなければならないのは、検査者が描画過程に同伴するがために、対象者理解が歪む危険、つまり、心理学的に言えばバイアスがかかってしまうことである。しかし河合（1993）も述べているように、「自分も動かされた作品に対しては、一般に言われてい

るような意味での“分析”や“解釈”などできることではなく、それとの“格闘”が必要」であり、「それこそが本当の“解釈”」である。したがって、今後は、検査者体験によって生じた検査者の内的反応を、バウム（と同時に対象者）を理解する上で極めて重要な要素として、学問的に取り上げていく必要があると考える。

IV おわりに

本研究では、同一対象者に対して個別法と集団法とでバウムテストを一度ずつ施行し、それらの結果を絵の読み手の印象に焦点を当てて検討した。その結果、両実施法で描かれたバウムを、マッチング法で組み合わせることは比較的容易であり、印象評定に大きな差がないことが認められた。また、絵の読み手は描線の特徴に敏感に反応していることから、描線に関する詳しい研究が今後求められることが示唆された。さらに、検査者体験を検討した結果、検査者の印象は個別法と集団法とで大きく異なる可能性も認められた。したがって、実施法の要因は絵の読み手の印象に与える影響は少ないが、検査者の印象に関してはその限りでないことが明らかとなった。

臨床場面におけるバウムテストの活用という点では、今後、検査者体験についても議論をする必要があろう。本稿は、検査者体験の重要性と議論の先駆けとして、有益な知見と考えられる。

<付記>

事例の一部は日本ロールシャッハ学会第12回大会一般研究にて発表した。また、本研究の一部は平成21-22年度科学研究費補助金（研究活動スタート支援：21830047）により実施された。

文献

- 1) 青木健次 (1980) 投影描画法の基礎的研究 (第1報) 一再検査信頼性. 心理学研究, **51** (1), 9-17.
- 2) 河合隼雄 (1993) 中年クライシス. 朝日新聞社. pp. 11-12.
- 3) 岸本寛史 (2002) バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群. 心理臨床学研究, **20** (1), 1-11.
- 4) 岸本寛史 (2006) コッホにとっての「心理診断」.

学園の臨床研究 (富山大学保健管理センター紀要), **5**, 27-36.

- 5) Koch, K. (2008) *Der Baumtest : Der Baumzeichenversuch als psychodiagnostisches Hilfsmittel. 12. Auflage.* Bern : Verlag Hans Huber.
- 6) 小川俊樹・福森崇貴・角田陽子 (2005) 心理臨床の場における心理検査の使用頻度について. 日本心理臨床学会第24回大会発表論文集, 263.
- 7) 佐渡忠洋・坂本佳織・伊藤宗親 (2010) わが国のバウムテスト研究の変遷—バウムテスト文献レビュー (第一報). 岐阜カリキュラム開発研究, **28** (1), 12-20.
- 8) 佐渡忠洋 (2010) 実施法と評定者間信頼性からみたバウムテスト研究の精度—バウムテスト文献レビュー (第二報). 岐阜カリキュラム開発研究, **28** (1), 21-32.
- 9) 佐々木玲二 (2006) 風景構成法における個別法と集団法. 日本箱庭療法学会第20回大会発表論文集, 96-97.
- 10) 高橋雅春・高橋依子 (1986) 樹木画テスト. 文教書院. p. 14.
- 11) 高石浩一 (2005) 臨床心理アセスメント技法. 氏原寛ほか (編) 心理臨床大辞典, 改訂版. 培風館. pp. 448-452.
- 12) Tolor, A. (1968) The graphomotor techniques. *Journal of Projective Techniques & Personality Assessment*, **32** (3), 222-228.
- 13) 上田優子 (2004) 個人面接場面と集団場面での描画比較. 島根大学教育学部心理臨床・教育相談室紀要, **3**, 109-118.
- 14) 渡部洋・土屋隆裕 (1994) 樹木画の印象的評価の特徴について. 東京大学教育学部紀要, **34**, 195-205.